

---

# せめて、今だけ。

北川瑞稀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

せめて、今だけ。

### 【コード】

N0835J

### 【作者名】

北川瑞稀

### 【あらすじ】

「心地よいこの場所で、君と居られますように。…せめて、今だけ。」

新 蘭。中学生設定。蘭が恋心に気付く前のお話。

サイトからの再掲載です

夏の放課後。校庭からサッカー部の練習している音が聴こえてくる。

ボールをゴールに入れたとき、周囲の人たちから嬉しそうな歓声が上がると、私まで嬉しくなる。

ほら、今も聴こえてきた。

ゴールを決めたのは幼馴染の工藤新一。

新一は、サッカー部の期待の新星でポジションはミッドフィルダー。いつもみんなの中心に居て、みんなの頼れる存在みたいな人。だけど結構いい加減で、本を読むためなら睡眠も食事も忘れちゃうようなヤツ。大の推理小説好きで、口を開けばホームズの話ばかりしてる。

…そして、私の好きな人。

やっぱり、サッカーしてるときの新一はかっこいいなあ…。

悔しいけどそう思っちゃう。

コートを駆け抜ける新一の汗が、太陽に反射してきらきら光って…まるで地上の太陽みたい。

「おい、蘭ぁーん！」

新一の声だ。私の元へ駆けてくる。

そんなに大きな声、出さないでよ。恥ずかしいな。

「何？」

それでも私は返事をする。大好きな、新一だから。もっとも、本人には…って言うか誰にもこんなこと言えないけどね。

「今日さー、おじさん居ねえんだろ？だつたらさ、オレの家で作っていかねえ？オレの家のほうが近くて楽だろーし…」

「えー…何？夕食作るのがめんどくさいから私に作ってもらおうって？」

「あ、バレた？」

恋人みたいな会話をしているにもかかわらず、新一の表情はいつもと変わらない。幼い頃のように、無邪気に笑ってる。私はというと、今こうやって話してるだけで胸の動悸が激しくなってきたて、顔が赤くなってるないかひそかに心配してるくらいなのに。

…なんか、負けてるみたいで嫌だなあ…そういうの。

「…しょうがないな、もう！作りに行つてあげるわよ！」

「え、マジ？サンキュー、蘭！」

新一がイタズラっ子のように、ニカツと笑った。

…でも本当にしょうがない。負けを認めたっていうのはちょっと癪だけど、こうやって新一の笑顔を見るだけでこんなにも心が弾んでいる。

小さい頃から私に元気を与えてくれた新一の笑顔。何百回も、何千回も見てきたはずなのに、なんでこんなにドキドキするんだろう。

集合がかかったのか、新一は部員たちの元へ帰っていつてしまった。…夕飯はハンバーグがいい、なんてちゃっかりリクエストしてから。

新一がサッカー部のみんなに冷やかされているのが見える。中心にいる新一はなにやら赤くなって慌てている。…好きな人に、誤解されるとでも思ってるの？

…ただの幼馴染なのに、な。

そう、ただの幼馴染。親友って言うとなんか変だし、恋人ではない。でも付き合ってる人がいない私たちにとっては、多分：一番“近い”存在。

なのに…なんで？目の前にいる新一は、私知ってる新一じゃないみたい。いつも女の子に騒がれて、デレデレして。マナージャーらしき女の子にタオル渡されて、周りに冷やかされて。

昔はそこは私の場所だったのに。

胸が、イタイ。

知らない、知らない、シラナイ。

こんなヒト、知らないよ。…知りたく、ない。あんなヒト。

なのに。

知りたくない、とってしまったのに、やっぱり傍にいたいと思う、私がいる。全てを知り尽くしてしまいたいと思う、私がいる。

この感情は、何？

スベテヲシリツクシタラ、コノカンジヨウモキエルノダロウカ。

理解<sup>わか</sup>らない、わからない、ワカラナイ。  
今は何も考えられない。

“トモダチ”でもなく、“コイビト”でもない、私たちのこの関係を表す言葉なんて、私にはひとつしか思いつかない。

“幼馴染み”

…そう、他の誰になんと言われようとも、他の誰がそう言っていたとしても、私たちは幼馴染み。

誰よりも近くにいて、だけど遠い。それは親友などではなく、家族などではなく、あくまでも“幼馴染み”。…それでいい。

今の私にはこの場所は心地よすぎるから。

この感情あはれがなんなのか、まだわかりたくないから。

新一が迷惑でもいい。

『1111』にいたい。

だから、せめて、今だけ。

心地よいこの場所で、君と居られますように。

私のすぐ隣に、君が居ますように。

「ほら、夕食作ってあげるんだから買い物手伝ってよ！」

大声で新一に向かって声を張り上げると、私は走り出した。

今にも沈みそうな太陽が、そっと微笑んだ。　　そんな、気がした。



(後書き)

コナンの二次創作は初めてです。誤字脱字・おかしいと思った点があればご指摘下さい。

今日から冬休みなので、これを機にじゃんじゃん投稿したいなと思つてます。

駄文ながら読んでいただきありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0835j/>

---

せめて、今だけ。

2011年10月6日08時21分発行